エイブリズム社会を生きながら、問い返す

立教大学：矢吹康夫

研究の背景

被差別マイノリティや社会問題の当事者を対象とした調査・研究を行っていると、自分は、フィールドの人びとを「社会批判のネタ」（伊奈・中村 2007: 12-3）に使っているのではないかと自問することがある。身近な非当事者やより大きな制度・構造が変わらなくてもこの社会を生き抜くために彼／彼女たちが獲得した対処戦略は、当事者コミュニティで蓄積・継承される経験知として有用である。一方でそれらは、必ずしも社会変革を求めてはおらず、むしろ適応的・同調的な技法とも言える。そんな人びとを「植民地化された」「過社会化された」「飼い慣らされた」マイノリティなどと評価するのは暴力的であるが、かといって現状追認的でよいのだろうかと葛藤も覚えてしまうのである。

研究目的と対象

そこで本報告では、この葛藤を解消する議論の糸口を提供することを目的に、疾患や外傷によって「ふつう」とは異なる外見をもつ「見た目問題」当事者を検討の対象とする。なぜなら、彼／彼女たちは、軽度障害者などとも同様に（秋風 2013）、「できるように強いる社会」において、できるようになることが相対的には容易な存在だからである。そのため、できるようになることが望ましいという規範やイデオロギー（エイブリズム）を自明視・内面化しやすく、自身が「できてしまっている」社会をわざわざ問い返す必要も感じにくいと考えられるのである（星加 2013: 36-7）。

方法

本報告で分析に用いるライフストーリー研究は、語りの内容をより深く理解するために語りの方法や語る目的にも照準するのが特徴であり、調査者と調査協力者との協働／共同によって語りが生み出されることを強調する（桜井・石川編 2015）。こうしたインタビュー場面への注目は、ニーズとしては顕在化しにくい／より不可視化されやすい生きづらさを発見し、対象化するのに適している。

考察と結論

考察と結論では、インタビューをもとに「見た目問題」当事者たちがどのようにして「できてしまっている」のかを整理し、そこで語られる多彩な対処戦略の臨床的意義をまずは確認する。そのうえで、当事者たちがドミナントなストーリーに回収されまいとして発する揶揄や笑いから、エイブリズム社会を動揺・相対化させる解釈とともに、現場にも還元可能な実践を提示する。

参考文献

秋風千恵, 2013,『軽度障害の社会学――「異化＆統合」をめざして』ハーベスト社.

星加良司, 2013,「社会モデルの分岐点――実践性は諸刃の剣？」川越敏司・川島聡・星加良司編『障害学のリハビリテーション――障害の社会モデルその射程と限界』生活書院, 20-40.

伊奈正人・中村好孝, 2007,『社会学的想像力のために』世界思想社.

桜井厚・石川良子編, 2015,『ライフストーリー研究に何ができるか――対話的構築主義の批判的継承』新曜社.